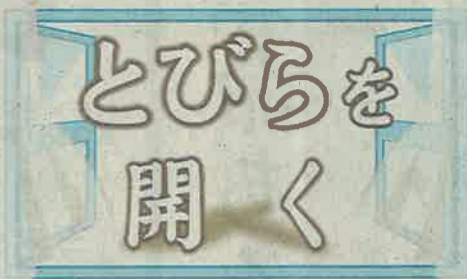


志民の輪

カルチャー

スポーツワイド

ものがたり



祖父母の介護や病気の親の看病、弟妹の世話など、日常的に家族のケアを担う子ども「ヤングケアラー」がクラスに1、2人はいると言われています。現状を知ろうと、支援団体や元当事者らによる情報交換会が、仙台市青葉区で開催されました。ケアの負担により課外活動や進学を諦めるケースがあること、家族の世話をするのを当たり前と思っているため、支援者とながりにくいことなどが浮き彫りになりました。家族のケアを家族に任せきりにせず、社会で支えていく必要性が提示されました。

大人だけで限界

ヤングケアラーの支援を行う一般社団法人ヤングケアラー協会（東京都）の運

家族ケア 社会で支え

営メンバーで、元ヤングケアラーでもある小林鮎奈さんは「ヤングケアラーは現代では普通に起こり得る」と述べました。

背景には、少子高齢化、核家族・ひとり親世帯の増加、正社員・終身雇用から非正規雇用の増加といった人口構造や家族形態、雇用・労働状況の変化などがあります。働くことができる大人が働かないとそもそも生活できず、ケアが必要な家族に適切な治療なども受けさせることができません。大人だけで収入を得る必要を訴えました。

ヤングケアラーの現状学ぶ情報交換会



家族を表す黄色いハートを抱きしめて泣いているヤングケアラーをイメージしたイラスト。仙台市市民活動サポートセンターのスタッフが作成した

? ヤングケアラー 日本では法令上の定義がまだなく、一般的には一般社団法人日本ケアラー連盟（東京都）が発表した「家族にケアを要する人がいる場合に、大人が担うようなケア責任を引き受け、家事や家族の世話、介護、感情面のサポートなどを行っている、18歳未満の子どものことを指す。18歳になれば解決することではなく、支援の対象となる年齢やケアなどをどうするか議論が続いている。

「子どもにも「家族を助けてほしい」という気持ちがあります。問題は家族のケアをすること自体ではなく、ケアの代わりの担い手がおらず負担がかかること、進学や受験、課外活動など「本当は興味があるのに諦めてしまう」こととして「家族のことは家族で支える必要を訴えました。子ども・若者の支援を行

「負担と思わず」

担当スタッフの森川ゆとりさんは「すでにアスイクの他のサービス利用者なら情報を届けてつながることができると、そうでない場合は当事者とながらぶらう」と、支援情報を届ける難しさを明かします。当



ヤングケアラーの現状を知る情報交換会＝5月18日、仙台市市民活動サポートセンター

事者には「どこまでならお手伝いで、どこからがヤングケアラーなの？」という疑問があり、支援者側の思考とかが合わないからこそ難しいそうです。

アスイクのオンラインサロンでピアサポーターとして活動する元ヤングケアラーの天野茉莉さんも「家族のことなので当たり前と思っていたし、料理や小さな子の面倒を見るのは好きな

堵の声や、料理の味にこだわる家事の担い手同士として意気投合する場面もあったそうです。

「近所」助けに

ヤングケアラーの子どもや、その可能性がある子どもへの接し方として「ヤングケアラーだとレッテルを貼ったり、かわいそうと思ったりするのはなく、その子が何を思い、何を求めているのか耳を傾けてほしい」と小林さん、森川さん、天野さんは口をそろえました。

「自分や自分がやっていることを認めてほしい」「進学や就職など大きな決断をする時に一緒にいてほしい」。そんな時、小林さんは「近所の大人」に助けられたそうです。学校の先生に相談することはありませんでしたが、先生が自分を気にかけてくれていたことは心に残っているそうです。声をかけ、見守る大人の存在は大事なのだと教えてくれました。近所は小さな社会。近所の大人の助けは、社会で支える形の一つなのかもしれません。（NPO法人せんだい・みやぎNPOセンター 菅野祥子）